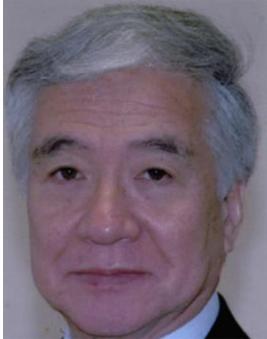


## 平成 17 年度日本認知症ケア学会・読売認知症ケア賞「功労賞」



木川田 典 彌 (きかわだ のりや)

社会福祉法人 典人会・理事長

1936 (昭和 11) 年 10 月 19 日生

### 【授賞理由】

木川田氏が取り組んできた地域社会に対する認知症ケアの積極的な啓発や全国に先駆けて認知症の問題を身近にとらえてかつ分かりやすく伝えようとした劇団の活動、さらに諸外国とのさまざまな研究交流は地域の果たす役割の重要性を全国に示すものである。その功績に対し、本賞を授与するものである。

### 【略 歴】

1962 年 3 月	岩手医科大学医学部卒業
1967 年 3 月	岩手医科大学大学院修了
1967 年 4 月	岩手医科大学歯学部生理学教室助手
1968 年 9 月	岩手県立大船渡病院外科勤務
1990 年 6 月	地ノ森クリニック勤務
1990 年 7 月	地ノ森クリニック法人化 医療法人勝久会設立 理事長に就任
1993 年 7 月	社会福祉法人典人会創設 理事長に就任
2000 年 4 月	医療法人希望会 藤沢病院 (精神科) 理事長に就任
2000 年 8 月	岩手県痴呆症高齢者グループホーム協会会長に就任
2000 年 12 月	全国痴呆症高齢者グループホーム協会常任理事に就任
2001 年 3 月	全国老人保健施設協会理事に就任
2003 年 4 月	更生保護法人岩手県更生保護協会副理事長に就任
2003 年 5 月	全国痴呆症高齢者グループホーム協会代表理事に就任
2005 年 4 月	社団法人全国老人保健施設協会副会長に就任

### 【功績, 社会貢献】

#### I. 地元に根ざした地域への積極的な認知症ケアに関する啓蒙活動と事業展開

私は、1974 年より透析・移植医療に取り組んできましたが、当時は透析施設数や信頼できる医師が少なかったため、60 キロメートルも遠くの町からバス、汽車、バスなどを乗り継いで通院していた透析者も少なくありませんでした。そこで、私は透析者救済のために 1976 年に自動車による無料の透析者だけの送迎を全国に先駆けて開始させました。この送迎の行為は、当時日本においては誇れる例をみない透析者への全人的サービスでありま

した。ちなみにこのサービスは現在も継続し29年間無事故であります。この送迎サービスの提供は、認知症高齢透析者等を入院看護から在宅での介護や看取りを可能にしました。

そして、私は1990年7月に医療法人勝久会理事長に就任後、認知症ケアの課題に真剣に取り組む、認知症の人の理想郷をつくろうと、1991年5月に認知症対応の老人保健施設を創設し、全国に先駆けて認知症高齢者対策に取り組んできました。

施設ケアだけではなく、家族に対する啓蒙活動が大切だとの強い認識から同年「気仙呆け老人をかかえる家族の会」を地元気仙地方に設立し、現在も会長としてイニシアティブをとっています。また、真に認知症の人へのかかわりを理解してもらうためには、地域の方々により認知症の問題を身近に捉えてかつ分かりやすく伝えようと、「気仙呆け老人をかかえる家族の会」の会員が中心となり、ボランティア劇団「気仙ボケー座」を1995年に結成指導したのも私の認知症ケアに対する熱意が大きく反映されたのであります。その後、「気仙ボケー座」は現在までに122回の公演を全国規模で行うに至り、5万人を超える方々に観ていただいております。地元の方言を駆使したユーモラスな寸劇が毎回好評を博し、地域に認知症の理解が広がっていることは確信のもてるどころです。この一座ではアルツハイマー病の告知の問題もすでに扱い、かつ演じており、この告知の問題は2004年10月に京都で行われた国際アルツハイマー病協会の国際会議で提起されましたが一座は世界の認知症ケアをリードしていたといえると思われま。

また、私は、1993年社会福祉法人典人会を設立し、認知症専門の小規模なデイサービスセンターを開所しました。そこではデイサービスでの支援ではありましたが、当初からお年寄りその人の個人性に主眼をおき、畑仕事や馴染みの場所へのバスハイク、昔の食事づくりなどに取り組んできました。小規模で家庭的な雰囲気での実践は、お年寄りの豊かな表情や意欲の向上などの行動変化として表れ、各種学会等で報告されております。その成果が1996年に岩手県では初の全国でも8番目となるグループホーム「ひまわり」への開所につながりました。グループホームでは徹底したその人らしい生活支援を目指し、ゆったりとしたなかにも可能性を最大限に発揮してもらうようなかかわりを実践してきました。デイサービスは昼間だけのかかわりでしたが、グループホームは24時間、365日の密着したかかわりとなっていることから、その成果も目をみはるものがありました。

## II. 新しいスタイルの認知症ケアを地方から全国へ発信する

私が運営しているグループホーム「ひまわり」での全人的ケアの成果を全国に発信しようとの強い思いから、私のリーダーシップのもと、1997年10月21日、片いなかである岩手県大船渡市において、「全国痴呆症高齢者ケア大会」を主催しました。これは、全国規模での認知症高齢者ケアに関する大会の先駆けとなったものであります。

その大会では、全国から、専門家、現場の人、家族、行政の人々1000余名が、一同に会し、海外や日本における認知症高齢者のケア手法やシステムを学ぶとともに、認知症の人が人間らしく暮らせるケアのあり方を深めるものとなりました。

日本社会事業大学の村川浩一教授、呆け老人をかかえる家族会の高見国代表理事、当時

は厚生省の専門官で現在は日本大学の内藤佳津雄教授など日本の認知症ケアのリーダー的存在になった方々がこの大会の講師を務めていただきました。

また、海外講師陣としては、福祉先進国からはスウェーデンのアンベッケン夫妻、日本と似通った国柄とのことでイタリア・アルツハイマー病協会のパドリツァ・スパディン会長、オーストラリアからはハモンド・ケア・グループのジャッド理事長、フレミング所長が参集していただきました。どの方々も認知症ケアの分野で世界をリードしている方々ばかりであります。

この大会は、主催した私の予想をはるかに超えた成果を勝ち得たことは、まさに画期的なものと同方面から高い評価をいただいております。認知症の問題がクローズアップされる以前に、この大会がもたれ、広く全国各地に発信できた意義は大きいと思われま

### Ⅲ. 海外との共同研究によるグローバルな活動

私は、海外との共同研究も積極的に展開しています。

まず1つは、1998年4月から現在、世界の認知症ケアをリードしているオーストラリアのハモンド・ケア・グループとの共同研究であります。当初の2年間は「小規模」で「家庭的なこと」をキーワードに主として認知症の人の物理的環境についての研究でありました。その研究成果を全国に発信しようと、2000年2月15日～16日、東京都（江戸東京博物館）で「日・豪の痴呆症高齢者ケア」と題して「日・豪共同研究大会」を主催しました。2年間にわたって共同研究をしてきた集大成として企画したものでした。全国から500名が集い、とくに「人と環境」に焦点を当て、グループホームの今後のあり方を考える機会を提供しました。次の2年間では、認知症の人の感情に焦点をあてた「認知症高齢者の感情反応研究」を行いました。グループホームでも入居者の重度化が課題となっていますが、言語でのコミュニケーション能力が低下した認知症の人は、表情などで感情を豊かに表しており、ケアも感情反応を科学的にキャッチするべきであるとの結論を得ました。この成果は、各種学会、研究会などで発表されております。

2つ目の共同研究はイタリアのアルツハイマー病協会とであります。イタリアと日本は家族制度が似通っている点に着目し、認知症高齢者をだれがみるのがその人にとって幸せなのかを考えることをテーマにしております。現在、日本では「社会がみる」とのことで介護保険が整備されておりますが、韓国やイタリアは「家族がみる」というスタンスで国からの若干の介護手当が支給されています。社会がみるのがよいのか、家族がみるのがよいのか、10年後の社会を予想するとすれば、どちらの社会が高齢者にとって本当に幸せなのかを分析するという研究内容であります。家族の絆が強いイタリアでは幼児期から、「絵本」を通して、認知症高齢者に対する啓蒙活動を積極的に行っています。私の運営する施設でもいくつかの保育園で、この絵本による幼児期教育に取り組んでおり、偏見のない（心のバリアーのない）自然なかかわりができるような地域への一助となっております。その成果は、各種学会、研究会などで発表されております。

#### IV. 各種事業者団体のリーダーとしての活躍

私は、これまでの実績から、認知症ケアにかかわるさまざまな要職にも就いて活動を展開しています。

全国痴呆症高齢者グループホーム協会代表理事，全国老健施設協会副会長，日本認知症ケア学会理事，日本美容福祉学会理事等という数々の要職を担い，認知症の人々が豊かに暮らすため，またかかわる者の質の向上のために尽力してきました。とくに，急増し続けるグループホームについては，その質にかかわり，職員の研修事業や質の評価事業について，積極的にリーダーシップを発揮しながら取り組んできました。